

(技術名) 冬春期促成栽培下における「研交6号」の適正な着果条件							
(要約) 「研交6号」を促成栽培する場合に、5節程度離して着果を行うことにより、黄化果実の発生を減らすことができる。							
農業研究センター・野菜花き班				連絡先	098-840-8506		
部会名	野菜・花き	専門	栽培	対象	ゴーヤー	分類	指導
普及対象地域							

[背景・ねらい]

ゴーヤーの新品種「研交6号」は促成栽培下においても既存品種「汐風」に比べて果実突起が丸く果皮色が濃緑な高品質ゴーヤー品種として開発された品種であるが、2～3月頃に黄化果実が発生しやすい。本研究では、「研交6号」の黄化果実が発生する要因を明らかにし、黄化果実の発生を低減するための着果条件を検討する。

[成果の内容・特徴]

1. 10月後半定植で栽培し、孫づる第一雌花開花期より週当たり5日間健全な雌花にすべて受粉した場合、「研交6号」の黄化果実の発生数は「汐風」と比較して多くなり、特に3月が最も多くなる(図1)が、収量は同等である(データ省略)。
2. 発生した黄化果実は、受粉から黄化するまでの期間が、正常に収穫された果実に比べ長い。また、黄化果実の果実重は正常に収穫された果実よりも軽く、収穫適期サイズまで肥大する前に黄化している。よって、黄化の要因は着果負担による果実肥大の遅れによるものである(表1)。
3. 「研交6号」の受粉管理で、既に着果している節位から5節以上離して受粉した場合は、5節以内に着果した場合と比較して、黄化果実の発生を減らすことができる(図2)。
4. 5節以上離して受粉した場合の収量と秀品率は、5節以内に着果した場合と同等である(データ省略)。

[成果の活用面・留意点]

1. ゴーヤー新品種「研交6号」の黄化果実発生対策として活用する。
2. 本成果の根拠となるデータは、2013～2014年度の試験によるものであり、黄化果実までの日数等は、定植時期や各年の温度や日射などの気象条件、草勢によって異なる。
3. 受粉の節位を離す基準を5節としたのは、他府県の試験成績による最適着果割合(熊本：4節あたり1果実、鹿児島県：5節あたり1果実)を参考にした。

[具体的データ]

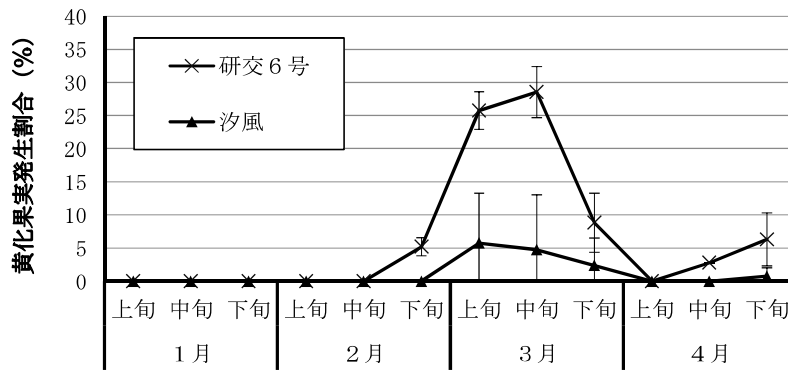


図1 品種の違いによる黄化果実発生割合^z

^z 各処理区のデータは、収穫時期別の可販果本数に対する黄化果実発生割合

表1 「研交6号」の黄化果実の受粉から収穫までの経過日数と果実特性

区分	受粉から収穫までの経過日数 (日)			果実重 (g)			果長 (cm)		
	2月	3月	4月	2月	3月	4月	2月	3月	4月
可販果実	29.0 ^z	28.2	19.6	243.4	220.4	209.4	22.7	21.8	20.3
黄化果実 ^y	42.9	38.7	33.8	228.6	165.5	151.8	22.4	19.4	17.8
有意性 ^x	**	**	**	*	**	**	NS	**	**

^z 表中のデータは、2014年度の試験によるもの。

^y *はt検定により5%水準で、**は1%水準で有意性があることを示し、NSは有意差がないことを示す。

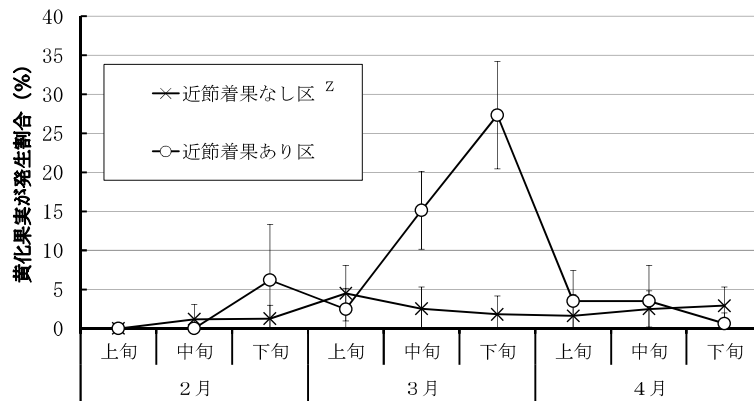


図2 近節位着果の有無による黄化果実発生割合

^z 近節着果なし区は、既に着果している節位と5節以上離して受粉を行った。

[その他]

課題 ID : 2012 農 012、2012 農 016

研究課題名 : 次世代沖縄ブランド作物特産化推進事業、ゴーヤー安定生産技術確立推進事業
 予算区分 : 沖縄振興特別推進交付金事業、その他 (園芸振興課・ゴーヤー安定生産技術確立推進事業)

研究期間 (事業期間) : 2013 年度 (2012 年~2017 年)、2014 年度 (2012 年~2014 年)

研究担当者 : 谷合直樹、島袋朝子、平田雅輝

発表論文等 : なし。